

『切り絵アニメーション』ワークショップ

Workshop of Stopmotion animation using collage

安井 健二*

Kenji Yasui

地域の子育て支援を目的とする講座として、切り絵工作とアニメーション制作を体験するワークショップを担当した。そこでの就学前の幼児の親子を対象としたテーマ設定を含む環境づくりや必要となった機材についての記録、切り絵を素材としたアニメーション体験の意義について考察する。

1. はじめに

帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター・親子教室の一講座として、2015年6月27日(土)に『切り絵でアニメーション』と称するワークショップを行なった。会場は帝塚山大学学園前キャンパス18号館・子育て支援センターである。同センターの設置目的は、地域と連携した住民の子育て支援と、同学部の研究機会を設けることである。親子教室では年間四回、就学前の幼児と保護者の参加者を募集し、学部の特徴を生かした体験型ワークショップを開催している。

今回行なった講座内容は主に「切り絵による作品制作」と「切り絵作品の写真撮影」、撮影した写真を素材としたアニメーション映像の上映会の実施となる。最前段に講座の説明、後段のまとめやアンケートまでを含めたおよそ二時間のタイムテーブルだ。

2. 作業環境

(1) 参加者とテーマ設定

当日は17組の親子が参加することになった。子供の年齢(3～5歳)と人数(20名)を鑑み、講座を飽きさせないような「手作業(工作)」と「全身運動(撮影)」の二点を設定した。いずれも子供主体での進行を想定している。

アニメーション制作には描く画像を原稿とする様式もあるが、動かす物をつくるときにも、撮影する段階でも、より手続きの少ない・直感的な作業が体験講座としては相応しい。そこで切り絵をモチーフ制作手段に採用し、それを置き換えてもらいつつ写真を撮影することにした。

またアニメーションという分野から想起されるファンタジー要素を担保しつつ、進行をスムーズにするため、テーマは「海(海中)」とした。ある程度の現実感と非現実感が混在し、かつ撮影時には変化のない広場のようなロケーション設定が混乱を招かず適当と判断したためだ。そこに登場する「海の生き物」を工作し、「海を動く」様子を撮影し、最後にアニメーションの原理を明らかにできればとの流れである。今回のような、静止している物体を少しずつ変化させる毎に写真に撮って映像化する手法は「コマ撮りアニメーション」「ストップモーションアニメーション」と呼ばれる。

*居住空間デザイン学科講師

(2) 切り絵工作の準備

ワークショップ前半は、のちの撮影時に各自で操演することとなる「海の生き物」を、切り絵工作によって一人で体ずつ制作することである。参加者は親子連れなのでいくらかの支援が期待できるが、子供の自主性に任せた作業となるのが理想とされる。

事前の打ち合わせから作業意図を汲んでいただき、工作の道具や材料は子育て支援センターに用意していただいた。ハサミ（ナイフは不使用）、接着剤、セロハンテープなどの道具、材料には「色画用紙・色紙」「写真記事等の切り抜きが可能な雑誌や新聞」「クレヨンや色鉛筆」「リボンやフリル、紐」「マスキングテープ（華やかな柄の入ったものもある）」など当日にはそれぞれカゴ一杯にまとめられ、制作前から工作心を刺激する教室空間となっていた。

(3) 撮影機材と方法

当日の撮影機材としてデジタル一眼レフカメラ・Nikon D5100、編集機材にラップトップパソコン・Apple MacbookPro、機材の同期使用のためNikon Camera Control Pro 2（同社のカメラをパソコンから遠隔操作できる、リモートコントロールソフトウェア）を導入、撮影した写真データの編集用にはMacbookProにAdobe社のAfter Effects CS4も取り入れている。また会場の壁にパソコンのディスプレイ表示をミラーリング投影するため、液晶プロジェクター・EPSON EH-TW410を持ち込んだ。

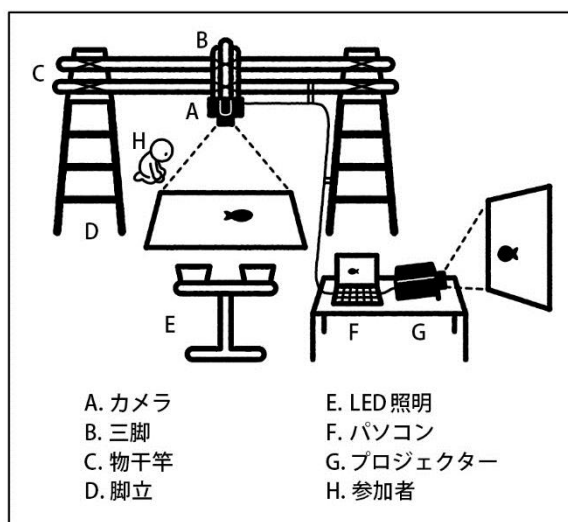
後日参加者に進呈するDVD-Video制作には、後編集で映像と合わせるサウンドの制作にApple社GarageBand、ビデオオーサリング（再生機器で視聴可能な状態にすること）ソフトウェアの同社iDVDを別のパソコンで使用するようになった。

カメラとパソコンはUSB端子で接続し、リモートコントロールソフトウェアと同期させるとディスプレイにはレンズに写る「海」が操作パネルとともに表示される。シャッターは操作パネルから切ることが出来る、操演の状態を確認しながら撮影を進められる仕組みとした。パソコンをプロジェクターとミラーリングし、会場の壁に投影すると、参加者からも進行中の「海と海の生き物」の様子を確認することが可能となる。

(4) 撮影準備

撮影のため、事前に会場教室にて簡易スタジオの設営が行なわれた。建築工事の現場保護等に使用されるブルーシートを床に敷き、上空からカメラレンズを真下に向けた状態で画面いっぱい構えると「海」に見立てられる。横長の長方形としてカメラの画角（記録される映像の枠）に合うように縦2メートル・横3メートル程度を確保し、また撮影時の参加者の逃げ場になるよう、周囲に適度の余裕ある範囲までシートを広げた。

またカメラの設置のため「海」を左右両側から挟むように、組み立てた高さ2メートルの脚立・二台を離して並べ、それぞれの最上部に長さ4メートルの物干竿の端を載せて固定した。物干竿は同じ長さのものをレールのように平行して二本、脚立最上部で離れた状態としている。これはカメラを安定して固定するためだ。



撮影時の構成イメージ

カメラは脚を閉じた状態の三脚に装着し、まとまっている脚部分を二本の物干竿に直交するよう、荷造り用の樹脂バンドにより結束した。照明の基本は会場の天井光、さらに準備していただいた高輝度 LED 投光器を撮影時の画角の上部にあたる方向から、レンズへ光の映り込みのないよう配慮して設置した。作業が短時間のため、カメラと画角・焦点距離は固定、カット割りや場面展開等を行なわない、また「海」という舞台設定などの条件から今回のセッティングは導かれた。

3. ワークショップ当日

(1) 切り絵工作

会場の入り口近い側のスペースに座卓タイプの長机が並び、講座開始時に参加者は着座している。親子教室のイントロダクションから、作例によりワークショップの「切り絵による作品制作」と「切り絵作品の写真撮影」について説明を行なう。個々の切り絵作品の制作には30分間を充てることを伝え、さまざまな材料や道具が手に渡ると、各参加者親子は魚やタコ、海藻のような生き物等の制作を始めた。この工程では子育て支援センターおよび学生ボランティアのスタッフが、アイデア出しや素材選びなどの補助を行なった。

(2) 撮影

撮影時間は40分間を予定し、複数名単位で同時に行なう。今回は切り絵作品の早く完成した参加者の順に5~8名を1グループとして、20名の参加者を計3つに分け、1グループの撮影時間の目安は10分間程度とした。

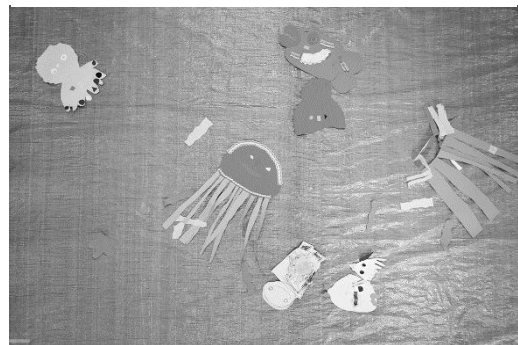
人数がまとまれば、グループ毎に会場奥側の簡易スタジオ・ブルーシートの「海」へ移動してもらう。はじめは画角の外に各自の作品を置いて待機、生き物作品の何も写っていない状態で二~三回シャッターを切る。作品が画角に入るよう数センチから数十センチずつ移動させて置き直し、参加者が画角の外に出た状態で一回シャッターを切る。その続きとなるよう思い思いに想定した道筋に沿わせ、「作品の移動、参加者の撤収、撮影」の工程を繰り返し、1グループ(一幕)につき20~23ショット分記録した。また一幕毎の撮影終盤になるにつれ、生き物作品がだんだん画角の外に出ていくよう作業誘導を行なった。これは作品たちの海(舞台)への入場と退場がグループ順に循環されるような、のちの映像編集工程への配慮でもある。

「海」上の作業の様子は会場突き当りの壁へのプロジェクター投影で確認できる。

3つ目のグループは工作する時間が長くなるためか、繊細な造作が見られた。また撮影の手順も先のグループの様子からにわかに理解が進むためか、後発グループの方が相対的にデリケートな操演を行っていたのが印象的だ。



第一グループのーコマ



第二グループのーコマ



第三グループのーコマ

(3) 編集と上映会

グループ毎に撮影が終わると、保護者にアンケート記入を要請し、3グループのすべての写真が確保できた時点から上映会へ向けての編集が行なわれる。

記録された写真から不要なショットを取り除き、「一秒あたり五枚」の写真が連続して再生時間されるようムービーデータ（Quicktimeアニメーション形式/.mov）として保存する。そのままでは3つのグループ・三幕分の63枚が13秒間足らずの上映時間で終わってしまうため、三幕分で一本となったデータはループ再生（映像の終わりを始まりへ繋ぐ再生）を行なうことにした。撮影作業の確認に使用していたセッティングをそのまま利用して、ムービーデータをパソコンで再生、プロジェクターから壁投影する。

連続再生するとはいえ「一秒あたり五枚」では冷静に見られないほど目紛しいとの感触があり、再生時間を伸長することにした。その場で「一秒あたり三枚」に編集し直し、63枚をほぼ21秒間の映像として披露すると会場の一同から“納得の空気”が生まれた。三幕分のループ再生、「自分の仕事」が見られるのは三回に一回ではあるが、じつは他グループの分にも目を奪われるひと時となった。

映像化された「自分の仕事」を何度も再生して見続けていたい気持ちは、アニメーション制作の経験者として共感するところである。自身による判断の積み重ねの連続が、目の前をまたたく間に再現されていく様は、見ていてしばらく飽きることはない。

オーサリングを済ませたDVD-Videoは後日参加者に引き取りに来てもらうことにした。当日の映像本編を3ループさせたものにサウンドと短いオープニング・エンドロールを追加、メニュー操作画面などを備えた同ディスクは子育て支援センターにも保管され、閲覧も可能だ。

4. さいごに

当日のアンケートでは全17組の参加者から「非常に楽しかった」15組、「楽しかった」2組との回答があり、切り絵工作とアニメーション体験を有意義に感じてもらえたようだ。保護者の感想では、豊富な材料が使えることや、撮影に徐々に理解を示す子供の成長に感嘆する内容が目立った。子供らには、素材に手を加えることで自分だけの作品が出来上がる喜びを感じ、静止している作品に命が吹き込まれたように動き出すことに感動するという、講座の意義を受け止めてもらえたはずだ。

本来は絶え間のない連続する経時を過ごすところに、アニメーション制作は運動と時間を小刻みに止めて確認しながら行なわれる。創造性とともな時間管理のマネジメント能力も必要とされる、一種独特なクリエイティビティといえる。ワークショップでのこうした体験は、日常の「時空」を意識して観察する契機となり、より細やかな配慮をもって生活を送ることに繋がるのではなかろうか。

本講座の担当および文章にしまとめる機会とご協力をいただいた、現代生活学部子育て支援センターの関係者のみなさまに感謝いたします。